2005.1.1

月刊通信

はなしがい

第222号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499
郵便振替 00130-6-577697

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Webページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円〒共）

最近、テレビのアナウンスの声がとても気になります。「みなさん……」などと呼びかけられると白々しい感じです。いったい誰に向かって呼びかけているのだろうと思います。また、テレビドラマのナレーションも気になります。最近は、「ナレーション」ではなく「語り」と称しているのですが、「語り」とは思えません。誰に向けるともなく、空中に声を放っている感じです。

演出家の鴻上尚史が『あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント』（2002講談社）で、同じような問題を取り上げています。

「僕は、ファーストフードで、いつも「ポテトもいかがですか?」と聞かれるたびに、お尻がムズムズしていました。」

ウェイトレスのコトバが「相手と話す言葉」ではないからだと言うのです。わたしがアナウンサーの声やナレーションに感じた思いと似ています。

●「三つの輪」と三つのコトバ

鴻上氏は、舞台の原理を応用して話しコトバを分類しています。基準になるのが「三つの輪」です。これは舞台上の人物に当たる三種類の照明です。

「第一の輪」とは、ひとりだけに照明が当たる状態です。直径一メートルほどで周囲は真っ暗ですから、人物の関心は自分にだけ向けられます。「第二の輪」は、直径一・五から二メートルで、人物の関心は同じ輪にいる相手に向けられます。そして、「第三の輪」では、照明は舞台に広く当たるので、人物の関心が舞台全体に向けられます。

この「三つの輪」とコトバのやりとりが対応します。「第一の輪」が「自分に話す言葉（ひとり言）」、「第二の輪」が「相手と話す言葉」、「第三の輪」が「みんなと話す言葉」ということになります。

そこで、さっきのファーストフードのウェイトレスのコトバに戻りましょう。鴻上氏はウェイトレスのコトバが「第一の輪」の「自分に話す言葉」になっていると言うのです。わたしも似たような経験をしていますから、ウェイトレスのコトバの感じは分かります。しかし、だからといって、ウェイトレスの関心が自分自身に向いていると言えるでしょうか。

鴻上氏は「みんなに話す言葉」は「誰にも言ってない言葉」になる危険があると指摘して、「ラジオのＤＪで、一番だめな人は、「みなさん」と話し出す人です」と言います。わたしも賛成です。アナウンサーに感じる違和感と同じです。

　ところが、ウェイトレスのコトバも「自分に話す言葉」だから、「誰にも言ってない言葉」なのだといいます。「ひとり言」は「誰にも言ってない言葉」だと考えているようです。わたしはこれには異論がありますが、「みんなと話す言葉」についての次のような指摘には賛成です。

「「みんな」に対する興味とは、みんなはひとりひとりが集まっている集団なんだという意識です。」

「「第三の輪」のことばとは「みんな」のひとりひとりを意識したコトバです。」

　それではどんな話し方になるのかと期待がわきます。しかし残念ながら、三つのコトバを組み合わせて話せばいいという常識的な結論です。

　わたしが三つのコトバのうちで大切だと思ったのは、「自分に話す言葉（ひとり言）」でした。これをわたしは「ひとりで黙って考えるためのコトバ」ととらえます。「ひとり言」とは、「誰にも言ってない言葉」ではありません。もうひとりの自分を意識に浮かべて「対話」をするコトバです。

　今の社会では、自分を相手にして「ひとり言」の言えない青年が増えているようです。自分がないまま「相手」や「みんな」に話しかけてもコトバは貧しくなるでしょう。それなのに、社会生活では、そんなコトバを使うことを強いられています。それはアナウンスやナレーションの白々しさにも通じます。かたちばかりでいいのなら、「みなさん」と呼びかけるのはむずかしくありません。

　文学作品の「朗読」でも、ナレーションのようなよみ方をする人は大ぜいいます。「みんなと話す言葉」が「誰にも言ってない言葉」になっています。また、「語り」というのもありますが、だれも相手にしていない空虚な声ばかりです。本来の「語り」は特定の個人に向かって語りかけるものです。

　私たちが日常生活で耳にする声も同じことです。駅の構内やデパートで放送される声は、だれに向かっ

2005.1.1　はなしがい　222号

て語られているのかわかりません。「みなさん、みなさん……」としきりに呼びかけるのですが、どれも「誰にも言ってない言葉」に聞こえます。そんな環境で育った子どもたちが「対話」の能力に欠けていたり、自分自身との「対話」が苦手なのはムリもないことです。

●「対話」とコトバの能力

　三つのコトバは、子どもの成長において次のように発達します。まず「相手と話す言葉」、次に「自分に話す言葉」、最後に「みんなと話す言葉」です。子どものコトバの習得は三歳ごろから始まるのですが、その前提として、親子の人間関係を基礎にした「対話」のやりとりがあります。のちに自分ひとりで「対話」のやりとりができるようになります。それが子どもの「ひとり言」です。さらに発達すると、黙って頭の中で「対話」ができるようになります。

　つまり、「相手と話す言葉」が内面化して「自分に話す言葉」となるのです。そして、自分で自分に話しかける力がつくのです。それは自分を意識して考えられる能力です。それがまた、「相手と話す言葉」と「みんなと話す言葉」の支えとなるのです。さっきのウェイトレスについて言うなら、「相手と話す言葉」ばかりでなく、「自分に話す言葉」も不十分なのでしょう。また、「みなさん」と呼びかける人たちのコトバも、「自分に話す言葉」が欠けているようです。

　「対話」の訓練を経ていない「ひとり言」は、「誰にも言ってない言葉」です。わたしたちは、常に生き生きした人間の声で語りたいものです。それは、かたちばかりのコトバではなく、人と人とが心から通じ合う声の響きです。相手に語りかけると同時に、もうひとりの自分にも語りかける声です。

　わたしが実践している文学作品の表現よみは、もうひとりの自分との「対話」の訓練になります。作品を声に出してよむとき、聞き手として、もうひとりの自分が意識されます。よんでいる自分と、聞いているもうひとりの自分とは、心のなかの声で「対話」を繰り広げます。そのようにして語られる声こそ、作品の世界を表現する声になるのです。

２００５.２.１
月刊通信

はなしがい

第223号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２-１５-６-５１５
電話&FAX.０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

先日、『日本語教育新聞』の記者から取材を受けました。外国人に日本語を教える人たちの読む二十万部発行の新聞です。近ごろ日本人の日本語の力の低下が問題なので、「見直そう！　日本人の日本語」という特集をするのだそうです。

　日本人の日本語の力について、わたしは二つのことを話しました。第一は、コトバを文のレベルで考えること。コトバの問題というと、たいてい単語について取り上げられますが、単語は文の中で意味を持ちます。単語でのコミュニケーションは省略された文なのです。人の考えは文のかたちで表現されますから、単語でのコミュニケーションでは不十分です。文のかたちで考えを表現すれば正確に正確に伝わります。第二は、文と文とを論理でつなぐこと。とくに接続語と論理の関係を話しました。人はコトバでお互いの意志を伝え合って行動します。しかし、なぜそうするべきかということはあまり考えません。とくに近ごろの若い人たちには、常識が理由として通用しなくなっています。日本人同士でもお互いの理解の前提となる知識や常識が危うくなっています。

　私たちは今あらためて自分の考えを明確な論理のかたちで組み立てて語る必要があります。コトバのやりとりを通じてお互いの考えを理解することも一つの「教育」なのだと言えるでしょう。

●「教育」と「教育科学」

　最近、わたしはフランスの教育学の本を読みました。ガストン・ミヤラレ（石堂常世訳）『教育科学』（初版1987/2刷1990白水社文庫クセジュ）です。これまで教育についていろいろな本を読んできましたが、教育にはどのような広がりがあり、どのような研究分野があるのか、詳しいのに驚きました。

　「教育科学」は、フランスでは一九六七年に大学で正式に認められた学問です。「教育」ということばについて、この本では四つの意味を上げています。

　第一は、社会的な「制度」としての教育制度のことです。たとえば、フランスの教育、アメリカの教育、日本の教育などという教育の意味です。第二は、教育の営みの結果としての「教育」のことです。つまり「わたしはよい教育を受けた」というときの教

育です。一人ひとりの人間はいわば全体としての「教育」の「所産」なのです。第三に、教育の「過程」そのものです。つまり、教育が実践され行われている場面としての教育です。第四に、教育過程としてプログラムあるいはカリキュラムの意味です。

「教育科学」という学問は、これらの意味を基本として、さまざまな角度から教育について科学的に研究するものです。

●「教育」の定義の広がり

「教育」の定義の古い例として次の二つが上げられています。一つは、フランスの社会学者デュールケムの定義（一九一一年）で、子どもを社会に従わせるという教育の強制的な面が強調されています。

「教育とは、社会生活においてまだ成熟していない世代に対して成人世代によって行使される作用である。教育の目的は、全体としての政治社会や、また子どもがとくに予定されている社会的環境が、子どもに対して要求する一定の肉体的、知的および道徳的状態を子どもの中に発現させせることである。」

もう一つは、フランスのカレーで開催の国際会議で発足した「国際新教育連盟」の定義（一九二一年）で、子どもの興味や発達や自発性を重視します。

「教育とは、個人として、また連帯意識によって統治される一社会の構成員として、各人ができうる限り完全に、自らの能力を発達させてゆけるように助成することである。教育は社会の進展と切り離されることができない。教育は社会の進歩を決定づける諸要因の一つである。／それゆえ、教育の目的ならびに教育の方法は、子ども、人間、社会に関するわれわれの認識が学問および経験によって増大するにつれて、絶えず修正されなければならない。」

これらの古い教育の定義は、次の四つの方面へ広げられるべきだと述べられます。

第一の広がりは、教育の適用対象となる人々の年齢が広がっていることです。日本でも「生涯学習」ということばが定着しているように、教育は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学という学校教育の場面に限られません。

第二の広がりは、子どもの教育が、学校制度のみ

で行われるものではなくなったことです。子どもたちは、学校の外でもさまざまなかたちで教育されています。毎日の生活での経験はもちろん、テレビ、ラジオ、新聞なども教育環境なのです。子どもたちは日々の生活でたくさんのことに出会い、物事の関係を学んでゆきます。「教育とは子どもたちの全生活領域にまたがっている」という言い方も大げさではありません。だからこそ教育環境としてふさわしい社会を作ることが重要なのです。

第三の広がりは、教育がただ単に知性や記憶力に関するものではないということです。今日の教育は、「個人の全面的形成」を目ざしています。身体面、道徳面、情操教育などを含む総合的なものです。

第四の広がりは、実際の教育過程の変化や教育過程のさまざまな局面の拡大です。ただ単に教師と生徒と向かい合う場面だけではなく、さまざまな形態で教育が行われるのです。

以上のように「教育」の定義を広めて考えるならば、さまざまな分野での「教育」が重要だということになります。

●「体験」を「経験」へと育てる

それでは、子どもたち自身は、どのように学ぶのでしょうか。その手がかりは「経験」ということばです。「経験」はこのように定義されます。

「多くの人々にとって、「経験」は「実践」と同意語である。フランスの辞書の定義では、まさにそれが最初に示されている意味である。「何ごとかを体験するという事実。ただしこの事実が一時的な現象とみられるだけでなく、思考を広げたり導いたりするという条件において」。また他の定義によれば、「実践によって獲得される知識」となっている。」

「体験」は「一時的な現象」であり、「思考を広げたり導いたりする」ものではありません。近ごろ行われている「総合的な教育」の授業は「体験」に終わる危険があります。「体験」の繰り返しでは知識も考える能力も育ちません。「体験」を「経験」にまで高めなければなりません。そのための手段がコトバであり、コトバによる「話し・聞き、読み・書き」の能力なのです。

近ごろ、音読と計算が流行っています。「百マス計算」も小学生の基礎訓練としてもてはやされています。わたしはずいぶん前から、岸本裕史『見える学力 見えない学力』（大月書店/初版1981.3.24版元品切）という文庫本で知っていました。

当時、わたしは調理師専門学校で、中学卒業で入学した学生に、読み書きや計算の授業をしていました。計算の練習として岸本氏の本にある「百マス計算」を使っていたのです。最近、ブックオフで手に入れて読みなおしたのですが、あらためて教育論の名著だと見直しました。以前に読んだはずなのに、計算練習の部分しか記憶にありませんでした。

●見える学力・見えない学力

今回、感心したのは、言語能力の養成を基礎にした教育論の体系です。まず、「見える学力、見えない学力」という名づけがすばらしい。近ごろ、子どもたちの学力低下が問題になっていますが、そもそも学力とは何か、学力とはいったいどんな力なのかはっきりしません。それが簡潔に定義されています。

わたしの解釈では「見える学力」とは、試験の点数ような結果としての学力です。テストの点数や試験の合否はわかりやすいものです。それに対して「見えない学力」とは、点数では評価できないもので、結果を生み出すのに必要な潜在能力です。

岸本氏が重視するのは「見えない学力」を育てることです。ところが、世の多くの人たちは、結果を出すのに役立ちそうな目先の技術ばかり追いかけています。近ごろ売れっ子の教育家も、岸本氏の考えから技術的な部分を取り出しているようです。

この本は小さくても内容が豊かです。文章のはしばしから教育について学ぶことができますが、今回は教育論の根本を大づかみに紹介しましょう。

●「生きる力」と言語能力

岸本氏は、まず「生きる力」の基礎となる三つをあげています。第一が体力・運動能力、第二が感応表現能力、第三が基礎学力です。

「基礎学力」とは、「読み書き計算を基軸にした能力」で、「見える学力」と「見えない学力」に分

２００５.３.１

月刊通信

はなしがい

第224号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２-１５-６-５１５
電話&FAX. ０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

かれます。そして「見えない学力」の二つの面にはそれぞれ二つの要素があります。第一の面は、言語能力で、家庭でのコトバのやりとりと読書です。第二の面は、あらゆる言語行為の基礎となるもので、遊びと家庭でのしつけです。

　第一の面の言語能力こそ教育論の根本です。わたしは学校の「総合の時間」で言語能力の養成が欠けているのに歯がゆい思いをしていたので力強い援軍を得た思いです。岸本氏の言語観はこうです。

「ことばを覚え、伝え、考え、表すといったことができるのは、この地球上では人間だけです。言語を習得できる遺伝的資質を持って生まれてくるのは、人間だけなのです。知的能力の中核は言語能力です。俗に頭がいいとか、高い知能を持っていると言われているのは、言語を思考の道具として自由に駆使したり、多彩に概念を操作できる能力が秀れているということなのです。この能力は、生まれてから後の言語環境のよしあしによって決まってきます。」

　「言語を習得できる遺伝的資質」が生まれつきであっても、「言語環境のよしあし」が言語能力を育てるのです。言語環境はまず家庭での会話のやりとりから始まります。コトバの使い方がものごとを考える基礎です。

「論理的に物事を考えるためには、必ず何がどうなんだという事実認識がまずできなければなりません。主語と述語を必要とします。筋道立てて物事を考えていくには、「それで」「だから」「したがって」といった順接や、「しかし」「だが」「けれども」「なのに」といった逆接ことばが自在に使えなければなりません。論理を組み立て、思考を展開していく際に、なくてはならないカギことばです。」

　言語能力を育てる環境は、家庭や学校の教育といった他律的なものばかりではありません。子どもが自律的に学ぶ手段として読書が重要です。読書は抽象力と創造力を育てる手段なのです。

「本というものは、目の前の現実やふだん気にもとめないでいた現象を、一度立ち止まって見直すきっかけを与えてくれます。事物や現象の奥にひそむ本質を見ぬくきっかけを、すぐれた読み物は提示してくれます。」

224号　はなしがい　2005. 3. 1

「小学校でよくできる子は、すべてといってよいほど読書好きです。（中略）読書好きの子は、書きとりと計算さえしっかり練習しておけば、まちがいなく上位の成績を得ることができるのです。」

　第三の要素は、遊びです。「それは、非言語的文化です。行動的・実践的文化とでも言えましょう。非言語的文化は、直感的・具体的・実際的な思考力を著しく促進します。そして、見える学力の着実な発達を保証しながら、人間としての生きる力や、人生を切り開いていく力そのものにもつながっていきます。」

　第四の要素であるしつけは四種類です。一つめは「基本的な生活習慣」の確立、「朝起きたらすぐねまきをたたむ、ふとんをおり重ねる、歯をみがく、顔を洗う、あいさつを交わす、朝食を取る、うんこをする……」といったことです。二つめは対人関係のしつけで、「他人に迷惑をかけない」「他人の人権を大切にする」「友達の喜ぶことをしてやる」「困っていたら助けてやる」などです。三つめは労働のしつけです。子どもに家事の分担をさせることで次のような意識と実行力が育ちます。「与えられた課題の解決のためには、見通しを持ち、計画を立てて、正確に、しかも効率のよい作業手順に沿って遂行しなければならない」

　四つめは「家庭学習」のしつけです。最初は親がついて面倒を見る必要があります。忙しいから無理だと思う人のためには、小さな肉屋さんで育った子どもの例があります。親の愛情があれば十分に可能であると納得できる事例です。そして毎日の学習時間の目安も「毎日、当該学年名かける十分間」と示しています。つまり、小学校一年生なら十分、小学二年生なら二十分、小学六年生なら六十分、中学三年生で一時間半です。なぜ勉強をするのかという話し合いも前提ですが、習慣としての持続が大切です。

　学力についての結論は次のようになります。

「学力は、言語能力×意欲×継続なのです。読書力と、やる気と、根気の積だと言ってよいでしょう。」

　それでは、どのように子どもを育てるのか。その技術はこの小さな文庫本の中にたっぷりと書かれています。

声に出して本を読むことが流行っています。ブームの火付け役である『声に出して読みたい日本語』シリーズも第四弾がでました。また、子どもたちへの読み聞かせも教育活動として定着したようです。しかし、本を声に出して読むことや読み聞かせについての方法や効果については、あまり深くは考えられていないようです。

●読み聞かせはいいことか？

脇明子『読む力は生きる力』（2005岩波書店）は、長く絵本の読み聞かせにかかわってきた著者が読書についての考えをまとめた本です。当然のように読み聞かせはいいことだと言われますが、そこにはいろいろな問題があることを知りました。

第一は、読み聞かせで育った大学生たちの読書力の問題です。脇さんは疑問を提出しています。

「いまの大学生たちのなかに、絵本を読み聞かせてもらって育ち、それを幸せな思い出としていながらも、「本を読むのは苦手」「読もうとしても頭に入ってこない」「自分で読むのはめんどう」などという人たちが、目立って増えてきつつある」

「絵本をたっぷり読み聞かせてもらったことが、はたして本当にプラスになっているのだろうか」

「絵や写真のある本を見るのは好きだが、文字だけの本は見る気がしない」という学生もいます。本を「読む」ではなく「見る」と言うのだそうです。幼児のころに絵本で育ったまま、大人になっても文字ばかりの本が読めないというのです。

「ひょっとするとその人たちは、絵本を読み聞かせてもらうことによって、「絵を見る」ことだけを学び、言葉に耳を傾け、物語をたどって楽しむことは、身につけてこなかったのかもしれません。」

教育も含めてビジュアル化ということが流行ったのは、もう二〇年ほど前のことでしょうか。マスコミでは、いわゆる写真雑誌というものがいくつも創刊されました。また、近ごろでは学校の教科書も文字が減って、図や写真が多くなりました。パソコン関係のマニュアルなども極端に文字が少なくなっています。

図や写真の利点は、コトバでは書ききれないほど

２００５.４.１

月刊通信

はなしがい

第225号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２－１５－６－５１５
電話&FAX. ０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

の情報を盛り込めることです。家族の古い記念写真が時代まで感じさせるのはそのいい例です。しかし、コトバを使って情報をよみとる力がなければ意味がありません。コトバの表現に支えられた図や写真こそ価値があるのです。図や写真が雰囲気で使われるのでは、考えを伝える手段にはなりません。

●本はどう読むのか？

第二は、読み聞かせとは何を目的とするのかという問題です。子どもたちが自立して本が読めるようにならなければ何の意味があるでしょうか。

学生たちが絵や写真を求めることと、アニメやテレビゲームにひかれることは関係があります。脇さんは「その延長上にあるのが、「本を読む」ことではなく、音声つきの画像を楽しむことの方であったとしても、すこしも不思議はない」と言います。

「私が教えているある学生は、これまでの読書体験についてのレポートの中で、高校時代に、読みたい本はたくさんあるのにどうしても本の中に入りこめず、「字は読めるのに本が読めないという、何とも言えないつらさと恥ずかしさ」を味わった、と書いてくれています。」

そもそも本を読むこと、つまり文章を読みとる方法があいまいなのです。ですから、今さら三色ボールペンで線を引いて読むなどということが話題になるのです。文字が読めさえすれば本が読めるという考えが意外に多いのです。

脇さんは読み聞かせの目的をはっきり言います。

「子どもに絵本を読み聞かせることが必要なのは、文字が読めないからだと考え、読めるようになるとすぐ読み聞かせをやめるのは、大きな考えちがいです。」

読み聞かせの一つの効用は、文字のコトバと声のコトバとの関連づけです。私たち大人は、すっかり音読の段階を卒業して、たいていの本を黙読しています。しかし、文字を文字として読むとしたら、まさに「見る」だけになってしまいます。

声のコトバはリアルです。文字にはないアクセント、イントネーション、プロミネンスなど、生き生きした響きがあります。文字のコトバに理解と感情

の響きを与えるのが声なのです。声に出して読むことで体全体が反応します。「うれしい」ということば一つとっても、目で見たときと口に出したときでは、心に感じる思いの深さがちがいます。

もちろん、ただ声に出せばよいというのではありません。文字を読み上げるだけでは単なる発声運動です。自分で自分の読み声に耳を傾けなければなりません。自分のよみ声を聞きながら内容を理解するのです。

●自分の声に耳を傾けるよみ方

脇さんは読書について次のように考えています。

「「本を読む」うえで肝心なのは、一文字一文字を読むことではなく、言葉をもとに想像力を働かせ、内容を理解し、物語の展開についていくことです。ところが、映像メディア相手に育った子どもたちは、イメージを作る仕事は全部映像がやってくれますから、自前のイメージを作ることができません。そのために、絵本なら楽しめても、絵がなくなると立ち往生してしまうのです。そうなると、本を手に取る場合でも、なるべく絵が多いものを選びがちで、絵を手がかりに物語の世界に入りこんで楽しむのではなく、絵を次々に見て、せいぜいその説明として文字を読むだけになります。」

声に出して読めば、一語一語、一文一文の意味がはっきり理解できますから、イメージも浮かびます。文章で書かれた物語は並べられた絵とはちがいます。文と文とははっきりした論理でつながっています。ていねいに順序よく読んでいけば物語の世界にはいれるのです。そのためにはまず聴く力が必要です。

今、子どもたちに欠けているのは耳を傾けて聴くことです。生き生きと表現されたコトバを聴くことです。かつて子どもたちは、おじいちゃんやおばあちゃん、お父さんやお母さんの語る声で育ちました。テレビから聞こえるような職業的な話し声ではなく、人間が人間に語りかける声が求められています。朗読も読み聞かせも、よみ手自身が自らの声に耳を傾けながら読むことが基本です。その声こそ子どもたちの想像力によい刺激を与えられる声なのです。

世は朗読本のブームです。朗読用として古い文学作品なども出版されています。しかし、学校の教科書からは漱石や鴎外をはじめとする近代文学が消えてしまいました。そのかわり、新しい世代の好みに合わせて最近の作家の作品が多く採用されています。これも読書力低下の原因ではないでしょうか。

ところで、本を読む力とはいったいどういうものなのでしょうか。一般には文字が読めれば本は読めるものと思われています。それで、ひらがなどころかむずかしい漢字まで読ませようとするような早期幼児教育もあります。小さな子どもは漢字を絵画のように見て覚えるそうです。だから、おとなが敬遠するような画数の多い漢字の方をかえっておもしろがるそうです。

しかし、文字が読めることがすなわち本が読めることではありません。文字は単語にまとまります。単語には意味があります。単語は文を組み立てます。文には「だれがどうしたのか」「何がどうなのか」という主部と述部との関係があります。そして、文と文とは論理的につながっているのです。長い文章では文のつながりをつかまなければなりません。

文章の構成は大きく分けると、物語の展開と論理の展開の二種類です。物語の展開には「すると」と「しかし」を使います。できごとが予想どおり進むときには「すると」でつながります。「私はデパートに行きました。すると大ぜいの人がいました。」という具合です。予想とちがうときには「しかし」です。「私は町に出かけました。しかし、人はあまりいませんでした。」となります。

論理の展開では「なぜなら」と「たとえば」を使います。「わたしは○○は……だと考える」と書いてから理由をつなぐのが「なぜなら」です。「私はお腹が空きました。なぜなら、朝食を抜いたからです。」という例です。また、具体例を示すには「たとえば」を使います。「わたしは甘いものが好きです。たとえば、羊羹（ようかん）ならばまるまる一本食べられます。」とつながります。

文章の流れと考えのすすめ方が分かれば、いちおう本は読めそうです。ところが、その先にもう一つの問題があります。

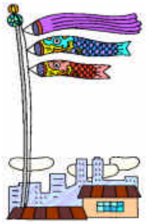
２００５.５.１

月刊通信

はなしがい

第226号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２−１５−６−５１５
電話&FAX.０３−３４４５−６４９９
郵便振替　００１３０−６−５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

●なぜ古典が読めなくなったのか？

わたしたちがふだん読むのは現代の本です。古い時代の本はあまり読みません。なぜでしょうか。漱石の現代文なら読みますが、鴎外の文語文になると敬遠しがちです。まして、江戸以前の古典文学になったら、専門家や研究者でもなければ、あえて読もうとする人はいません。

それに古典の読み方といったら、ふつうの本を読んで楽しむようにはいきません。高校時代の古典の授業はどうだったでしょうか。一語一句を分析して品詞名や活用形などをいちいち確かめるものでした。わたしは今思い返してみても、古典の内容がどんなだったのか、ほとんど記憶にありません。

つまり、江戸時代以前の古典文学は、今では私たちがふつうに読んで味わうものではなくなっています。そして、鴎外に代表される近代文学も、今や古典の域に入ろうとしているのです。このままいけば、おそらく文語体の近代文学も古典の運命をたどることでしょう。いつか、鴎外の「舞姫」も「古典」の教材として一語一句を文法的に分析するようになるかもしれません。

わたしは古典が読めなくなった原因の一つは、読者が作品の音声モデルを持てなくなったことにあると思います。わたしたちは黙読するときにも、声のモデルを手がかりに音声をイメージします。言語はもともと音声でしたから、文字のコトバには声のコトバの裏づけがあります。現代文の音声モデルなら日ごろ耳にする声の調子で間に合うでしょうが、古典の文学になるとモデルがありません。

そして、今では近代文学でさえ音声モデルを失いつつあります。樋口一葉については幸いなことに朗読家の幸田弘子さんがほとんどの作品を録音してくれています。しかし、そのほかの近代文学の作品についてはどうでしょうか。いくつか朗読のＣＤが出ていますが、多くの種類があるわけではありません。文学作品ごとに「語り口」がちがいますから、それぞれの作品の音声モデルとなるよみがほしいのです。漱石ならば「吾輩は猫である」「坊っちゃん」「三四郎」「こころ」とそれぞれ調子がちがうのです。

●子どもの教育と音声モデル

私たちが黙読で本を読むときにも、音声モデルにたよっています。タレントの書いた本や落語を筆記した本を読むとき、読者は著者や話し手の声を思い浮かべます。それと同じように、子どもが物語の本をひとりで読めるようになるのは、幼児期に親に本を読んでもらったり、学校で先生が読み上げる声を聞いたことがあるからです。

もちろん、音声モデルは本の読み聞かせばかりでできるものとは限りません。日常の会話によるコミュニケーションも大切です。コトバの豊かさは音声の言語にあります。文字に置き換えられた内容のほかに、声でしか表現できないものを含んでいます。家庭において、日ごろからお互いに心のこもったコトバのやりとりをしていれば、子どもは感情と一体化した声のコトバに敏感になるのです。

わたしは今、インターネットの「ケロログ」という音声ブログを利用して、日本の近代文学を中心に、いろいろな作品の表現よみを公開しています。わたしの表現よみを若い人たちに聴いてもらいたいと思って「銀河鉄道の夜」も全編よみあげました。今は総合アクセスランクのベスト５です。

近ごろ、街で若者が胸に小型の携帯デジタル音楽プレイヤーをぶら下げているのを見かけませんか。最近、売り上げ台数でＭＤプレーヤーを追い越したそうです。重さ数十グラムと小型で軽量なのに、数十時間の録音ができます。音楽を聞くならば一つの曲はせいぜい三分ほどですから何百何千曲が録音できます。ですから、音楽ばかりでなく長い録音も聞けるわけです。それで、アメリカでは昨年から、ポッドキャスティングといって、インターネットの放送や朗読の録音なども持ち歩く人が激増しています。

日本にはまだまだ文学作品の朗読を聴くという習慣がありません。テレビやラジオでも朗読が増えてきましたが、リアルさに欠けるよみが目立ちます。文学作品のよみには、もっともっとリアルな音声モデルが必要なのです。わたしの表現よみの音声モデルが、多くの人たちが文学作品をよむための音声モデルになればいいと思っています。

「いつまでコトバの勉強を続けるの？」と同人雑誌の仲間に言われたことがあります。もう一〇年ほど前のことです。当時、わたしのコトバ勉強は二〇年にわたるものでした。それから一〇年、まだ続けています。コトバの勉強などというと、いかにも形式的なもののように受け止められがちです。しかし、ただ単に文字の読み書きができて、日常的なコミュニケーションができればいいというものではありません。コトバというものの奥は深いのです。

つい最近、一冊の本を読んで、なおさらその感を深くしました。伊藤克敏『コトバの習得と喪失――心理言語学への招待』（2005.4.25勁草書房）です。

伊藤氏の研究はここ三〇年ほどの国内外の研究成果をまとめたものです。全五章の中心テーマは人間の心理とコトバとの関係です。子どもの言語習得や母語と外国語との関係、心理言語学の歴史などが書かれています。専門の研究書なのでちょっと読みにくいかもしれません。わたしもはじめは躊躇しましたが、余裕をもって読んでみると、コトバの勉強に役立つヒントがいくつもありました。

わたしがとくにおもしろく読んだのは、第一章です。幼児言語の発達がどのように行われるかについて書かれているのですが、いろいろな分野への応用が可能です。

第一に、おとなの言語能力の向上に役立ちます。幼児の言語発達の段階は、おとなの言語学習に応用できます。おとなもいわば日々繰り返しコトバの学習をし直しているのですから、幼児の言語発達の経過とも関係があるのです。第二に、第二言語である外国語の学びかたにも応用できます。たとえば、英語学習に、子どもの言語発達の道筋をたどるような方法を取り入れたら、学びやすくなりそうです。第三に、声のコトバの表現への応用です。わたしは文学作品の朗読を連想しました。子どもたちがどのように発声や発音を身につけ、声による表現をどのように獲得したのか――その過程は、おとなが声の表現を磨くときの参考にもなります。

●ことばの獲得の道すじ

伊藤氏の基本的な考えは、子どものコトバの発達

２００５.６.１

月刊通信

はなしがい

第227号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２−１５−６−５１５
電話&FAX.０３−３４４５−６４９９
郵便振替　００１３０−６−５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

が子どもの運動的な成長、心理的な成長とともに形成されるということです。有名な言語学者のチョムスキーは、人間は生まれつき言語を身につける能力を備えているといいます。伊藤氏の考えはそれに対立するものです。新しい研究成果もそれを証明するものとなっています。伊藤氏がとくに重視するのは、子どもと周囲の人たちとの関わりです。

　子どものコトバの発達について、わたしの知らない新しい知識がいろいろと紹介されていました。

「［子どもの］聴覚器官は、五、六か月の胎児期にすでに発達しており、外部の音を認識する能力を持っている。」

「胎教」の科学的な根拠です。ただし、子どもが音声としての言語に反応するのはもう少しあとのことです。子ども自身の運動能力の発達や心理的な能力との関わりが必要なのです。

　新生児には「生理的微笑」とよばれる自発的微笑があります。これが周囲の人たちからのはたらきかけをうながすのだそうです。そして、生後六か月くらいになると、周囲の事物を手にとって体感的に認識します。八か月では、さらに行動が広がります。つかまり立ちをしたり、湯飲みやコップをとって飲む真似や本を読む真似をしたり、音楽を聴いて調子をとるようになります。

　伊藤氏はこれらの運動とコトバの獲得との関係を重視します。おとなは、新しいコトバをコトバだけで学ぶことができますが、そこには能率的な長所があると同時に、コトバを空虚なものとしてしまう危険性もあります。

　ですから、子どものコトバを育てるためには、母親など周囲の人たちの「ことばかけ」が大切です。これについては養育者のコトバの五つの特徴が挙げられています。（1）声の調子が高い、（2）音韻上の修正、（3）繰り返しが多い、（4）命令や質問文、（5）文法構造の単純化

　これらは「ことばの離乳食」と呼ばれます。しかし、これはおとなでも、むずかしいことをわかりやすく人に説明するときには必要です。いわば、おなかをこわしたときのお粥です。話しかたや文章の表現の工夫にも通じます。重要な語句は声を高くして

強調したり、繰りかえしたり、主部と述部の単純な文型で話したり、書いたりするのです。

●声のコトバの知性と感情

　音声言語の発達についてもおもしろい事実があります。五、六か月のころ、まだ子音と母音の明確な「喃語（なんご）」が出る前に、「アーウー期」というのがあります。この時期にすでに感情のイントネーション（音調）が獲得されて、のちの分節音が入るワクとなるそうです。おとなはすでに固まったイントネーションのワクを持っています。そのために、声の表現をするとき、感情のない文字コトバの情報だけになりがちです。あえてアーウーの声に限定して発声してみることで、感情表現の訓練ができそうです。

　また、コトバのやりとりでは、相手の意図を理解することが大切です。子どもが最初に獲得するのが「要求」「否定」「命令」の意思表示です。

　とくに否定については「否定表現の習得の早いのは否定が強い感情を表すからであろう」という説を紹介してからこう説明します。

「否定、命令、要求は感情性が高く、疑問とか陳述のように理性的、知的ことばより先に発達するといえよう。」

　子どものコトバの発達においては、たしかに感情が先で知的なものがあとです。しかし、それはおとなになると感情を失うというのではありません。おとなにも感情は必要です。それは知的なコトバによって支えられた高いレベルの感情です。知性というといかにも冷たいもののようですが、感情のみの感情と知性と一体化した感情とはちがうものです。

　わたしの指導するよみの教室では、おとなが文学作品の感情の表現に苦労しています。ことばは感情と知性との総合されたものです。声のコトバにおいても、その延長である文字のコトバにおいても、感情が豊かで生き生きした知的なコトバの使い手になりたいものです。サン・テグジュペリ『星の王子さま』に「おとなはかつて子どもであったことを忘れている」とありました。かつての自分を見直すためにも、あらためて子どものコトバの発達について学んでみることをおすすめします。

なぜ勉強をするのか、なぜ学校に行くのかというのは、教育の根本的な問題です。教育をめぐる状況が変わるごとに繰り返して問うべきことです。

教育に関する本はいろいろありますが、根本的な問題を取り上げたものはそう多くはありません。苅谷剛彦／西研『考えあう技術――教育と社会を哲学する』（2005ちくま新書）は貴重な本です。

西氏がまえがきにスリリングな対話だったと書いたとおり、ふたりの発言の一言一言が刺激的です。まさに哲学的な対話というにふさわしい本です。わたしはまだ三分の一しか読んでいないのですが、書きたいことがあふれてきました。

●教育とは何か？

「教育とはそもそも何か？」について西氏は次のように定義します。

「教育とは、子どもを「社会の成員（大人）としてふさわしい存在」へと育て上げていくこと」

おとなにふさわしいあり方として二つあげています。一つは、はたらいて食べていける能力、もう一つは、ほかの人々の間でふさわしい振る舞いができる能力です。社会についての基本理念は、第一に「自由」、第二に「平等」、第三に「対等な市民によって形づくられる国家（市民社会）」です。

「自由」「平等」の理念などは当然と思われるかもしれません。しかし、いま日本では、憲法「改正」が議論され、基本的人権の内容や男女平等は見直すべきだという論も出ているのです。

これまでの教育論の考えにあるのは、国家対国民という図式でした。西氏は、近代社会における教育観の対立を次のように示します。

「社会に役立つ人間を育てるのか、それとも、自由で批判的な判断力を持つ人間を育てるのか」

日本の近代においては、もっぱら前者の教育がなされてきました。後者の教育は批判者によって行われました。西氏は次のように述べます。

「日本ではとくに後発国として近代化を押し進める必要があったため、「自由な独立した市民へと教育する」という観点が弱く、「優秀な労働力を作る」という観点での学校教育が行われ、その面ではかな

２００５．７．１

月刊通信

はなしがい

第228号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２－１５－６－５１５
電話&FAX. ０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

りの成功をおさめてきた」

西氏は日本の近代の特殊性を「後発近代」と呼びます。ところが、八〇年代ごろを境にして、国民が「自由の感覚」つまり「他者を傷つけないかぎり、ひとりひとりが自分の快楽と欲望を追求してよい」という考えを手にしてしまいました。「民主主義の行き過ぎ」とか「自由のはき違え」などと批判された事態がたしかに実現されたようです。しかも問題は、それが社会のあり方からまったく切りはなされた感覚だということです。

そこで西氏が教育再建の手がかりとするのは、封建社会を批判した「自由な市民からなる社会」という理念です。市民社会の実現に必要な教育は三つ、第一に「社会の一員として必要な基礎知識」、第二に「社会や集団を営む能力」、第三に「自ら人生を形づくり得る主体性」です。

第一の「基礎知識」は「職業選択の自由」を保証するものです。早い時期から専門に限った教育は「社会に役立つ人間」を作るには効率的ですが、職業選択の幅をせまくするし、人生や生きかたまで限定してしまいます。

第二は「国家」への直接参加のことではありません。これまでの組織論は支配するものと支配されるものといった二項対立でした。「社会」のルールに従うか「集団」に同調するかというものでした。西氏が考えるのは「必要なルールを取り決めたり、不必要なルールの改変を提案できるような」能力です。この教育のために、いま学校で行われている「総合的な教育」をあてることも可能です。

第三の「自ら人生を形づくる」という考えもユニークなものです。これは学校教育の最初の段階から必要です。それこそ本来の「生涯教育」というものでしょう。これら三つの条件は、古い教育観の対立を越えて、新しい社会の教育を提起しています。

●学ぶことの意味とは？

ほかにもふたりの対話にはいろいろとおもしろい指摘があるのでいくつか紹介しましょう。

まず、子どもたちの勉学意欲が衰えてきたのはなぜかという問題です。かつての勉学意欲は貧しさか

らの脱出とか立身出世のためでした。ところが、八〇年代の「消費社会」になると、それなりに豊かになり、進学のためというメリットがなくなります。大学卒業者が多くなればなるほど学歴の価値は薄れます。ところが、国民の多くが学ぶ意欲を失うなかで、上層部の人たちは怠りなく学業を重ねています。かえって下層の人たちほど学ばない傾向にあります。選ばれた少数に高度な教育を受けさせて、多くの国民を「社会に役立つ人間」にするという政策は生きています。

また、文部科学省が小中学校に配布した教材『心のノート』への批判もあります。西氏は「個々人の心がけをどうよくするか」ということだけで、「他人とどう関係して集団をつくりあげていけばよいか」とか、「おかしいと思ったらどのように言挙げして問題を共有し、関係や場面をつくり変えていけるか」という発想が全くないと批判します。

社会意識は子ども自らが獲得するべきものです。その場合、「個人」と「自己」との区別が重要です。「個人」とは社会的なもので、他人との関係で客観視できるものです。それに対して、「自己」とは心理や心情にかかわる面です。

「一人ひとりを大切にする教育をやれば、互いに大切にし合う個人が育成できる」と安易に考えることにも問題があります。たとえば、「差別された」という叫びがあったとき、たしかに当人には傷があった。しかし、「わたしは傷ついた。苦しい。だからこれはおかしい」と考えるのはまずいのです。それが本当に差別であるか、社会的にアンフェアーか。そこから議論を始めるべきだといいます。

社会的な存在として「個人」を自覚する教育については、アメリカの社会学者バーガーの「社会化」の考え方が参考になります。

「「社会化」というのには二つの面があって、一つは、社会のルールや規範を身につけること。もう一つは自分がつくりだされる過程だ」といいます。

つまり、「自由な市民」を育てる教育とは、社会の一員として必要な基礎知識を身につけるとともに、社会や集団を営む訓練を通じて、自らの人生を形づくることのできる主体性を育てることなのです。

2005.8.1

月刊通信

はなしがい

第229号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２-１５-６-５１５
電話&FAX.０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

東京新聞（05.8.1）に日本テレビの「火曜サスペンス劇場」が九月末で打ち切りになるという記事がありました。二時間ドラマのシリーズとして二十四年間の歴史があるそうです。シリーズ打ち切りの理由は例によって視聴率の低下です。二、三年前までは二〇％前後だったものが、近ごろはほとんど十五％以下だったそうです。

わたしが気になったのは、最近のドラマについてのコメントです。「短大の講師をしていたとき、若い子がドラマの筋を追えないって言うんです。今、物語を求めるのは高い年齢層」（放送評論家・松尾羊一）とか、「二時間見る根気がなくなって、犯人が登場する時間帯が早くなっている」（コラムニスト・ペリー荻野）とか、「読解力低下は、テレビ局と制作会社の『共犯』だ」（番組制作会社のあるプロデューサー）というのです。

火曜サスペンスのシリーズも初めはしっかりした作りでしたが、しだいに謎とき中心の単純なものになったようです。しかも、俳優の演技力で見せるのではなく、話題性のある俳優を見せるという風潮が追い打ちをかけました。たとえそうでも、若い人たちがドラマの筋を追えないとか、二時間見る根気がないというのは驚きです。

● スミルノフ著『心理学』

わたしはこのような傾向は例外だと片づけられない気がします。というのは、わたしが講師をする専門学校の学生たちにも感じるからです。たとえば、読書能力は年々低下しています。直感的にいえば、今の高校卒業生の総合的能力は、十五年前の中学卒業生レベルです。その基礎には「読み・書き、話し・聞き」の能力低下の問題があります。

そこでわたしが思いついたのが、スミルノフ著『ソビエトの教科書―心理学』（1965明治図書）という本です。今から五〇年前、旧ソビエト連邦ではスターリンの書いた言語学の本がきっかけで、言語の重要性が見直されました。それで心理学においても、さまざまな問題がコトバとの関わりで検討されました。その結果、高等学校の教科書としてまとまった本です。目次から項目を拾うと、感覚、知覚、注

意、記憶、思考、コトバ、想像、欲求、情動、意志、技能、才能、性格などについて、言語との関わりで書かれています。

●ドラマを見る能力とは？

ドラマを見ることはどのような活動なのでしょうか。それはただ単に画像と音声を受け入れるものではありません。画像と画像とを結びつけて、音声と画像とを関連づけるには想像力が必要です。

スミルノフは、「想像」について次のように定義します。「想像とは、形象、表象あるいは観念の形における新しいものの創造である。」

私たちがドラマを見ながら、「自分ならどうするか」とか考えることも一種の想像です。スミルノフは、「われわれは、想像の産物を点検するときにも、客観的現実にたちかえる」とか、「想像の過程そのものが、実践活動と緊密に結びついている」とか、「想像は現実に関する知識に依存する」とか書いています。

たしかに基本的な知識がなければ、ドラマを見ていてもおもしろくありません。若者たちが時代劇を見ないのも歴史的な知識が欠けているからでしょう。だから、アニメやＳＦが受けるのかも知れません。

また、スミルノフは、「想像は、人格のすべての特性と緊密に結びついている」と言います。ドラマの楽しみはその人の総合的な能力の発揮です。楽しむ能力がドラマを楽しむ条件です。見たものが何かわかること、できごとの関連づけができて、さまざまな感情が持てること、それらすべてが楽しみにつながります。

コトバと想像力とのかかわりは次のようになります。「直観的形象（注釈＝直観的イメージ）はふつう、コトバと緊密に結びついており、コトバと相互に作用しあう。コトバはしばしば形象の源泉である（形象を呼び起こす）とともに、形象を変化させたり、反対に、強化し、保持し、くり返し再生するための手段でもある。」

コトバがイメージのもとです。そして、イメージをコトバにすることで考えが発展します。単語でコトバをメモしたり、文章に書いたりすることとすべて

です。それによって、イメージを考えとして固定できます。書いたものをあとで読めば、元のイメージを再生することもできます。さらに、文章を書き換えることによってイメージが発展させられます。

●想像力の教育

テレビドラマは事物そのものではありません。ドラマの画像と音声は現実の姿そのままなので、事実と受け取られがちです。映画の初期に、悪役が出てくると、客席から興奮した観客がスクリーンに向かって靴を投げつけることがあったそうです。これは笑い話ですが、はたして、今の若者たちはテレビドラマについて勘違いはないものでしょうか。映画やドラマが知らぬ間に、行動や価値の基準になっているかもしれません。ドラマの筋が追えないとしたら、現実生活において出来事の関連をとらえることもおぼつかないでしょう。

そこで教育するべきことは「再生的な想像力」の能力です。コトバや図面や図式や楽譜などに記述されたものをもとにイメージをする能力です。とくに、コトバにもとづく想像力です。画像などの視覚的な情報は一見、だれにもわかりやすそうです。しかし、その意味をとらえるのはむずかしいことです。ドラマでも、場面と場面との論理があります。「しかし」でつながるのか、「だから」でつながるのか、「なぜなら」でつながるのかといった論理関係があります。論理能力は文章をよむことで鍛えられます。声に出して表現するためによむと、なおさら論理的な理解が深まります。

スミルノフはこう言います。「新しいものの表象は、実践的な課題、すなわち、その新しいものを物のかたちで表現すること――物を作ったり、画いたり、事実を劇化すること、など――を要求されることによって、いちじるしく鼓舞される。」

文章を声でよむことは、文字で表現された世界を声によって創りだすことです。教育に演劇を取り入れて、ドラマを書いたり、演じたりする方法もありますが、よむことはもっと簡単に実行できます。表現をするために、物をつくるという能力は、わたしたちの人生にとって重要な楽しみの一つなのです。

グレン・グールドはすばらしいピアニストであり、すぐれた音楽思想家です。一九三二年に生まれて一九八二年に五十歳で亡くなりました。十三歳でデビューして天才といわれましたが、三十二歳で演奏をやめてしまいます。その後、人々の声を音楽に見立てたラジオドキュメンタリーを作ったり、音楽についての執筆活動をしました。しかし、晩年までレコーディングのための演奏は続けていました。

●音楽の演奏会と「競争」

ジェフリー・ペイザント著『グレン・グールド――なぜコンサートを開かないか』(1981音楽之友社)には、グールドが「競争」を否定する考えを持っていたことが書かれています。グールドが演奏活動をやめたのは、コンサートがピアニスト同士の競争の場になっているという考えからです。自分はほかの演奏家よりも上手に演奏できるとか、見せ場を作って観客を感動させてやろうとするような工夫がいやになったのです。

著者は、グールドの発言や文書をまとめて、グールドの考えを的確に紹介してくれます。グールドは「競争するという事実の現象全体」には「人間の侵略性」があると考えています。スポーツ、ゲーム、商売などは、みんな「侵略性の一形態」だというのです。

グールド自身、「スポーツでの競争は、他のタイプの競争にとっても暗喩である。」といいます。グールドは、チェスのチャンピオンが「ぼくは連中(引用注=対戦相手)が身もだえするのを見るのは好きだ。ぼくは奴らのエゴを粉砕してやりたい」ということに反発します。

著者に言わせれば、「これは殺人の衝動である。殺人は何も肉体についてだけ言えるのではなく、心理的な殺人というのもあるのだ。肉体的な殺人は目に見えるが、心理的な殺人は陰険そのものだ。」ということです。

音楽のコンクールも「競争」の一種です。「コンセンサス(引用注=意見の一致)ということに重きを置くあまり、能力のなかでも、平均的な、誰も文句のつけようがない、いとも簡単に証明できる核だ

２００５.９.１

月刊通信

はなしがい

第230号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２-１５-６-５１５
電話&FAX.０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

けが抽出され」るので、ユニークな才能を持っている者の出る幕がありません。つまり、「すべての競争的な活動の下に横たわる衝動は、支配欲である。これは技術とか力の試し合いについて言えるだけじゃなくて、競争のあらゆる形態について言える真実である。」ということです。

●芸術の表現とテクノロジー

グールドが音楽の「競争」から離れたときに重視したのがテクノロジーの応用でした。

「グールドは、われわれの競争的な社会から総合的に選択する一つの方法、つまり、テクノロジーがわれわれに提供した代案を受け入れるように提案する。テクノロジーは人間の周辺に防護盾を持ち込む。その盾は肉体的な、もしくは心理的な規模において、人間が自他を比較する必要を取り除いてくれる。われわれはもはや、食物や避難所を求めて、動物のように未開の荒野で戦っている辺境人ではない。」

つまり、グールドのレコード作成は、競争とかかわりのないところで、音楽そのものの表現をすることだったのです。ほかの演奏家と競争するのではなくて、楽譜に書かれた曲そのものの表現です。そのために、録音の技術を徹底的に利用しました。一つの曲を何度も演奏して、よいところをツギハギすることも気にしません。グールド自身はピアノの演奏においては天才的な能力をもっていました。しかし、それを特権的なものとは考えませんでした。

もちろん、グールドに反対する人たちもいました。けれども、天才の演奏技術にたよることなく、だれもが使えるテクノロジーを優先させたのです

●音声認識ソフトによるコトバの訓練

わたしが愛用している音声認識ソフト・ドラゴンスピーチも新しいテクノロジーです。キーボードを使わなくても、人間の声でパソコンに文章が入力できるソフトです。話したことがそのまま文字になって文章が書けるのです。まだまだ普及していないソフトなのですが、わたしは、このソフトをコトバの教育に応用することを考えています。

音声認識ソフトの教育への可能性はいろいろ考え

られます。まずは、文章を読みあげることから始めることでしょう。とくに、ヘッドフォンで自分の声をモニターしながら入力をすると、声のコトバへの集中力がより高まります。

わたしは三つの教育的な効果を考えています。

第一は、単語の発音訓練です。文章を読み上げるときに、発音が正確かどうか確認できます。発音が悪いと、ソフトが間違った文字を示します。「朗読」と「道徳」などは、わたしもときどき間違えられることがあります。

第二は、「文」の意識を育てる訓練です。主部と述部を結びつけてものをいう訓練です。まずは、主語と述語のつながりです。「なにが・だれが」と言ったら、必ず「どうだ・どうした」がきます。また、修飾語と被修飾語、呼応する副詞の対応なども意識されます。

第三は、接続語による論理の訓練です。読み上げる文章の接続語は、あらかじめ四角で囲んでおいて声に出してみるのです。何回か繰り返して読んでみます。それから、接続語を隠して文章を読みながら接続語を当てはめる訓練もできます。

音声認識ソフトを使うと、話すコトバが次々に文章になりますから、話しは文章なのだという自覚が高まります。それで、きちんとした文で話せるようになります。

また、手を使わなくとも文章が書けるので、考えることに集中できます。ヘッドフォンをつけていると、自分の発する音声のコトバをモニターすると同時に、パソコンのモニターで文字のコトバのモニターもできます。つまり、音声のコトバと文字のコトバとが一体化するのです。

自分の考えが次々に文章になることは楽しいことです。それは試験でいい成績をとるための勉強とはちがった楽しみです。ほかの人との競争ではありません。グールドがレコーディングにおいて、さまざまなテクノロジーを応用したように、コトバの訓練においては、音声認識ソフトが役に立ちます。わたしは、これからも音声入力のソフトを応用したコトバの訓練についていろいろ工夫をして行こうと思っています。

若者たちが保守化しているといわれます。かつて、若者と言ったら、何であれ既成のものには反発をして、新しい生き方をしようと格闘したものです。ところが、近ごろはおとなしい若者ばかり目立ちます。できるだけ早く、大人の世界になじんでしまおうとするかのようです。とくに、ものの考え方や価値観についてそれが目立ちます。

今、日本は一つの節目を迎えています。国家財政の危機、自衛隊のイラク派兵、憲法の改定など、国の根本にかかわる問題があります。今後の日本を考えると、教育と社会や国家とのかかわりが気になります。時代とともに国家が変化する中で、子どもたちが生きのびるためには、どんな教育理念が必要なのか、根本を考えたくなります。

●ミルの教育論の基本

それで、わたしが手にしたのが、ジェームズ・ミル著（小川晃一訳）『教育論・政府論』（1983岩波文庫）でした。ミルは序論で教育の目的を次のように述べています。

「教育の目的は、個人をば、まず第一に自分自身の幸福にとり、第二に他の人びとの幸福にとり、できうる限り有用な手段とならしめることにある。」

すっきりします。基本は個人の幸福と他の人びとの幸福との両立です。他の人びとには、社会や共同体も含まれます。「人間は社会的な動物である」というとおり、個人だけで幸福が実現できるわけではありません。しかし、この問題の立て方は、うっかりすると、個人か社会かという二者択一のものとされがちです。今の若者たちはむしろ個人を放棄することを強いられているようです。そうして、何か大きなもの、たとえば神秘や占いなどの非合理にすがりつく危険もあります。

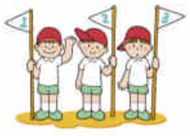
ミルは子どもの精神に働きかける二つの分野を示しています。一つは「物理的なもの」、もう一つは「精神的なもの」です。「物理的なもの」とは、健康、食物、空気、労働などです。普通は教育環境とは思えないものですが、近ごろは食事についての教育が「食育」と呼ばれて話題になっています。これも教育が根本から見直されている証拠かもしれませ

２００５．１０．１
月刊通信

はなしがい

第231号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２－１５－６－５１５
電話&FAX.０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

ん。そして、「精神的なもの」とは、家庭教育、学校教育、社会教育、政治教育という四つの教育環境です。つまり、ミルは、子どもたちの精神に働きかける広い分野を教育の場と考えているのです。

●教育すべき精神の資質

では、子どもに育てるべき人間の資質とは、いったい何でしょうか。ミルは三つをあげています。

第一が「知性」です。これには二つの要素があります。「知識」と「賢明さ」です。「知識」は「賢明さ」のもとで用いられねばなりません。いろいろなものごとのうちで、いったい何が幸福のために役立ち、何が役立たないのか判断できる能力です。しかし、個人の幸福追求から悪い結果が生まれることもあります。そこで必要になるのが欲望や欲求をコントロールする能力です。

それが第二の「自制心」です。個人の欲望が有害な方向に向かいそうなときに抑制する能力です。「自制心」は「忍耐」ともよばれます。「快楽に抗する力」「苦痛に抗する力」の二つから成ると言います。

第三は、「博愛」です。これは「正義」と「思いやり」に分けられます。「正義」とは「他の人に害をなさないように抑制すること」、「思いやり」とは、他の人に積極的に善をなすことです。

以上、三つの関係はこうまとまります。

「《知性》と《自制心》とは時には本人の幸福に関係する徳目とみられ、《博愛》は他人の幸福に関係する徳目とみられている。しかし真実はこうである。知性と自制心とはこれを持つ人の幸福に劣らず直接に他の人の幸福に関係するし、《博愛》は知性や自制心に劣らないくらい自分の幸福に欠かしえないものと考えられると。個人の幸福は、人類の幸福と関連しているがゆえに、現に、ある人の幸福に影響するものは、同時に一般に、他の人の幸福に影響を与える。」

●個人の幸福と人々の幸福

ミルの教育論の中心は、個人の幸福と他の人びとの幸福とのつながりをどう育てるかにあります。

ここに、個人が社会や共同体とつながる手がかりがあります。子どもの周囲の人たちの喜びが子どもの喜びになり、また、周りの人たちが子どもから得る喜びが子ども自身の喜びになるのです。それをどう教育するかについてこう述べられます。（引用中の「連鎖」とは、心の動きのことです）

「ことばやそのほか感情を伝えるサインによって、子どもがほかの人たちの連鎖をしばしば心に抱くようせしめられるとき、それら借りものの連鎖も習慣的となり、似たような影響を子どもの心に及ぼす。」

個人と他人とのつながりは、道徳心の根本です。その人の人生にとって重要な意味を持ちます。他の人の幸せを見て自分も喜びを感じたり、他の人の不幸を見て自分も苦しみを感じられること、その能力が人間にとって根本的に重要なのです。

しかし、人間にはさまざまな欲望があります。それは否定できません。たとえば、他の人の意志を支配したいという欲望があります。それを満たす手段はいろいろです。相手の愛情や賞賛を得ることや相手を恐怖させせたり苦痛を与えたりして得ることがあります。問題は、その欲望を「自制心」と「博愛」によってどのように調整するかということです。

ミルは家庭での「自制心」の教育の大切さについてこう述べます。

「もし初期の訓練によって快楽あるいは苦痛を過大視する習慣がつくられてしまうなら、生涯を通じて一方を得、他方を避けるのに過大の犠牲がなされ、幸福の量は減ぜられてしまう。」

わたしは以前から、おとなの世界でも教育の世界でも、やたらと「我慢」を強いる傾向を苦々しく感じています。これは他人から言われるべきことではありません。「自制心」とは、まさに自らで自らを規制する心のことです。道徳の問題なのです。

たとえ真実のコトバであっても、それがだれの口から、だれに向かって言われるかによって意味がなくなることもあります。幸福が物理的なものと精神的なものとの総合で成り立つなら、社会や国家もまた幸福の条件です。しかし、社会や国家には個人の持つべき精神の資質が当てはまらないのは残念なことです。

　人生や教育の大前提となる考え方があります。人間の性質を、善と見るか、悪と見るかです。いわゆる性善説と性悪説です。どちらをとるかによって人に対する態度が変わります。道徳や教育の根本にも、どちらかの考えがあります。子どもをほめて育てるのは性善説、罰を与えて育てるのは性悪説でしょう。
　人間の性質は善なのか悪なのか、いったい、どう考えたらよいのでしょうか。

●善と悪との弁証法

　エーリッヒ・フロム著（鈴木重吉訳）『悪について』（原著1964紀伊国屋書店）には善と悪の根本が書かれています。フロムはフロイトの心理学の継承者です。フロイトの精神分析の理論にマルクス主義を取り入れて社会の見方へと拡張しました。ドイツ生まれのユダヤ人でナチズムの成立と戦争の道を歩んだドイツ人の心理に強い関心を持っています。
　代表作である『自由からの逃走』（原著1951東京創元社）に根本理論は書かれていましたが、まだ明確ではありませんでした。十三年後の著作『悪について』には、人間心理の根本がわたしたちの人生や教育に生かせる「公式」として示されています。
　フロムの考えの根本は「人間は本来、生きるエネルギーに満たされている」ということです。人間が生き生きと生きることが第一です。人間の生き方や行動そのものの善悪を問うのではなく、生のエネルギーを人間らしく発揮することを重視しています。
　フロイトは、人間の性質をエロスとタナトス、つまり「性」と死との二つの衝動でとらえました。フロムは人間の「生」と死に関心をもちました。そして、どのような傾向が人間から生のエネルギーを奪うのかということについて解説をしています。

●死を愛好する傾向

　フロムは三つの現象をとりあげます。第一は、死を愛好する傾向、第二は、悪としてのナルチシズム、第三は、共生的・近親相姦的関係です。
　どれもフロイトの精神病理学の概念なので、いかめしい感じです。しかし、精神病理とは、どんな人間にも多かれ少なかれ見られる傾向が強化されたも

２００５. １１. １
月刊通信

はなしがい

第232号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明
〒141-0022 品川区東五反田２-１５-６-５１５
電話&FAX. ０３－３４４５－６４９９
郵便振替　００１３０－６－５７７６９７
電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

ので、実例を見れば安心して親しみがわきます。

　日常生活に見られる心理的な傾向には、生きるエネルギーを失わせるものと高めるものと二つがあります。それは、人生の考え方、人の見方、教育のしかたなどの基準になるものです。

　第一の「死を愛好する傾向」は、ネクロフィリアと呼ばれます。これは、性的倒錯における「死体と性交したい」とか、「死体と向かい合っていたい」という病理的な欲望です。

　この傾向の人は、死んでいるすべてに引きつけられます。たとば、死体、腐敗、排泄物、汚物などです。とくに「力」への態度に特徴があります。フロムは、人間の力はすべて殺人への衝動につながると言って、人間と力との関係を次のように言います。

　「人間の力にはすべて、煎じつめると殺人への物理的な力がその根底にある。私がある人を殺さず、その自由を奪うだけであったとしよう。またある人を慴伏させるとか、その所有物を奪ったとしよう――だが何をしようと、私のこれらの行為の背後には、殺しうる可能性を持つ力と、殺すことに喜びを感じる気持ちが必ず存在する。死を愛好するものは必然的に力を愛好する。かれには人間の最大の目的は、生を付与することではなくて、生を破壊することであり、力の使用は、環境により強制された一時的な行為ではなくて――それ自身生きる道なのである。」

　人間がスポーツという害のない形で力の行使をしていることが納得できます。死を愛好する人が政治の力を握るために起きた戦争の悲劇については繰返しヒトラーを例にしています。また、別の特徴に「生長しないものや機械的なものをすべて愛する。そしてまた、有機体を無機体に変貌し、生きているものを物体であるかのように機械的に接したいという欲望にかられる」傾向もあります。こういう人が教育をしたら子どもをどう扱うか想像がつきます。

　人との関係では「存在よりは所有」を重視して、所有できる限りにおいて相手との関わりをもちます。生き生きしたものは、常に変化してゆくものです。それを所有しようとするなら、その動きや生命を停止させねばならないということになります。

　そこで、「かれが生を深く恐れるのは、生がその

持てる性質上、無秩序で統御しにくいからである」となるのです。ここから、管理主義教育を進める人たちの精神構造も考えられます。

●生を愛して生きる教育

　では反対の「生を愛する傾向」とはどんなものでしょうか。フロムは詩的な表現で描き出しています。

「深く生を愛する人は、あらゆる所にみられる生と生長の過程に惹きつけられる。かれは停滞するよりも組み立てようとする。かれは常に驚異の目を開き、古いものに確証を見出しそれに安住するよりは、何か新しいものを発見しようとする。確からしさよりは冒険に満ちた生き方をしたいと考える。かれの生に接するあり方は、機械的というよりは機能的であり、部分よりは全体を、総和よりは構造を見る。かれが形成し、影響をしたいと思うのは、愛情、理性、自らの範であって、力でもなく、ものを寸断したり、官僚的態度で人間を物体のごとく支配することによってでもない。かれは単純な興奮よりは、生命と生命現象すべてに喜びを見いだす。」

　そしてフロムは「生を愛する傾向」を促す教育へのヒントも示しています。これらの指摘はわたしたちの人生と子どもの教育に生かすことができます。

　「最も重要な条件」は「その子どもが生を愛好する人びとともにある」ことです。ことさら「生を愛せよ」と説教しなくても、「思想よりも身振り、コトバよりも声の調子」で生の喜びが表現されます。

　実際には、次のことを心がけるべきだと言います。「①幼児期に常に他の人たちのあたたかい愛情に触れること、②自由であること、③脅威のないこと、④説教よりも実例によって内的な調和と強さを導く原理を教えこむこと、⑤「生きる技術」の指導、⑥他人に激励され、それに反応すること、⑦本当に楽しい生活の方法」―以上の七つです。

　こうして育った子どもたちには、さらに、フロムの指摘する二つの傾向、第二のナルチシズムからの脱出、第三の母親に代表されるものからの自立の課題が求められます。今回、この二つについては書ききれませんでしたので、機会があればまた取り上げることにします。

戦争や自然破壊が問題になると、決まって人間のエゴイズムや利己主義が指摘されます。前号で紹介した人間の心理の三つの傾向のうち一つがこれにかかわっています。エーリッヒ・フロム『悪について』(1965紀伊国屋書店)では、三つの傾向を三つの章で書いています。第一が「死を愛することと生を愛すること」、第二が「個人のナルチシズムと社会のナルチシズム」、第三が「近親相姦的きずな」です。今回取り上げるのは第二のナルチシズムの問題です。

●個人のナルチシズム

　フロムが前提とするのは、人間は生まれつきナルチシズムに支配されているというフロイトの考えです。そして、目標はナルチシズムの克服です。人間が成長していく過程で、どれだけナルチシズムの支配から自由になれるかということです。個人の成長とは「絶対的ナルチシズムから客観的な理性と他体愛へと進化する能力」のことです。

　ナルチシズムなどというと大げさに思うかもしれませんが、ごく日常的なところにその傾向はあります。自分の体や顔や姿を他人のものと替えたくないと考える人、医者に電話をかけて相手の都合も考えずに治療を申し込む人、愛する女性に「僕がこんなに愛しているのに僕を愛さないなんていうことがあろうか」と思う人、毎日何時間も鏡の前で顔や髪を整える女の人など、たいていの人にナルチシズムの傾向はあります。内気で謙虚な態度を見せる人の背後にさえ、ナルチシズムの傾向が隠れていることも珍しくありません。

　個人的なナルチシズムはさまざまな問題を起こします。第一に合理的判断をゆがめます。第二に批判された場合の情緒的反応です。ナルチスティックな人は、自分が批判されると非常に立腹します。しかし、このような傾向は病的な症状ではなくて、だれにでもある傾向です。だからこそ問題なのです。

●集団と社会のナルチシズム

　個人のナルチシズムには良性型と悪性型とがあります。「良性型のナルチシズムのダイナミックスは、自己を抑制するのである。仕事を推進するエネルギー

２００５．１２．１

月刊通信

はなしがい

第233号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所　渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田２−１５−６−５１５
電話&FAX.０３−３４４５−６４９９
郵便振替　００１３０−６−５７７６９７

電子メール　w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Ｗｅｂページ　http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（１年1,500円〒共）

は、大部分ナルチスティックな性質のものではあるが、仕事自体が現実と関係をもつことを必要とするため、絶えずナルチシズムを抑制し、その限界内に踏み止まらせている。」

　それに対して、「悪性型のナルチシズムの場合、その対象となるものは、その人の行為や製作した物ではなくて、彼が《所有する》ものである。例えばその肉体、容貌、健康、富などがそれである。（中略）もし私が私の《成就する》もののためでなく、私の《持っている》もののために「偉大」なのであれば、誰に対しても、何に対しても関係をもつ必要はなくなり、何の努力もいらなくなる。自分の偉大な姿を維持しようとして、私はしだいに現実から遠ざかり、私のナルチシズムによりふくれゆく自我が、私の空虚な創造の産物であることが暴露されないようにうまく身を守るため、ナルチシズムをさらに充実しなければならなくなる。こうして悪性のナルチシズムは自己制限を加えず、その結果世間嫌いになるばかりでなく、素朴な唯我論的なものとなってしまう。」

　このあたりから「引きこもり」の人たちの思いも想像できます。個人のナルチシズムは集団や社会とは対立するものです。そこで問題の解決方法が二つ考えられます。その一つは、外部からの批評や失敗が影響しないように、さらにナルチシズムを増大させることです。これは精神的な病気を引き起こす道です。もう一つは、現実そのものを、自分のイメージと一致するように変形させてしまうことです。そんな人が政治家になった例として、フロムは繰り返しヒトラーについて語ります。

●愛と平和とヒューマニズム

　ナルチシズムの心理を社会に広げると、国家や宗教などの暴力的対立の心理が解明できます。政治は集団のナルチシズムの働きを利用して人間を組織するのです。

　「生き永らえようとする組織集団では、集団がその成員からナルチスティックなエネルギーを与えられることが大切である。集団の生存にはある程度、その成員が集団の意義を自分の生命と同程度大切か、

またはより大切であると考え、さらには集団と比べ自分たちの集団が正しいか、優秀であるとさえ信じている事実に基づいている。」

　次のような政治家の発言は日本の首相の発言やそれに対するアジアの国々の反応を連想させます。

　「狂信的な演説家が、「私」と「私の家族」を国家（あるいは民族、宗教、政党等）に代えて、大衆にその優越性を語れば、その人は国家愛と神の愛などのために多くの人によって称賛され敬愛される。しかし他国民や他宗教は、自分たちが軽蔑されているという明白な理由から、この種の演説には激怒するのが普通である。」

　フロムが社会のナルチスティックな傾向に対する治療薬とするのはヒューマニズムです。人間が個人のナルチシズムに閉じこもるのではなく、普遍的な「人間」を愛するという精神です。歴史上の言葉がいろいろあります。キリスト教の「汝自身のごとく汝の隣人を愛せよ」（旧約聖書）とか、「汝の敵を愛せよ」（新約聖書）はその代表です。フロムは日本の仏教の「悟りをひらいた人」についても、自己のナルチシズムを克服した人たちであると述べています。そして、ヒューマニズムの根拠となる「愛」についても語ります。

　「すべての愛は強いナルチスティックな構成要素を持ち、女性に恋する男は、彼女を自分のナルチシズムの対象としている。したがって彼女は彼の部分となるがために彼女は素晴らしくて手に入れたい存在となる。（中略）ナルチスティックな人にとって、相手はありのままのその人間でも、また、実在する人間でもなく、ナルチスティックに慢心した自我の影として存在するにすぎない。他方、病理的でない恋愛は相互のナルチシズムに基礎づけられてはいない。それは互いに独立の存在であることを体験する二人が、互いに心を開襟し、合一しあうことのできるような関係を言うのである。愛を体験するためには、別離を体験せねばならない。」

　最後の一行は含蓄あることばです。「力」は暴力や戦争を生み出し、「死の愛好」を呼び起こします。フロムが語るのは暴力と戦争を否定する愛と平和の心理学なのです。